

初等小學

修身篇

石川鴻齋編輯

四

7
5
75

館			
館籍書會育教本日大			
函	四	一	
架	三	三	八
號	五	架	函
	冊	號	

K110,1
10
4

石川鴻齋編輯

初等
小學
脩身篇

東京 龍雲堂藏

小學脩身篇卷四

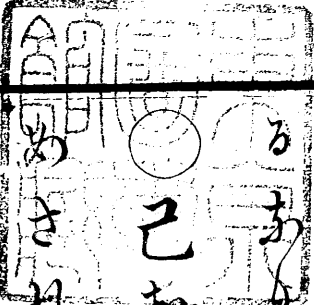
初等第三年前期

石川鴻齋編

○人に交るに、厚きを昔と以、厚
きと、人を責めずして、我を責む

大和俗訓

己を責むれば、身修まる、人を責
めざれば、恨らるることあり、
同



小學脩身篇 卷四

○人誰か過おからん、過て能く改むれば、善これより大あるのみ、おし、
左傳

○人吾心に合ざるとて、顔を勵しくし、辭を荒くして、人を怒り罵るべからば、童子訓

○人に交るに、吾心と顔色とを和

らげて、人を侮らざるのみ、善を行ふ始あり、吾氣に任せて、位に誇り才に矜り、人を侮り、無禮を爲すべからば、同上

○世の人、多く賤しき言を吐くとも、それを習ひ賤しき言を吐くべからば、小兒の言、賤しきのみ、殊に聽

き憎し、同上

○過を改むるの人の、天氣の新に晴れとるが如し、我自ら快し、人之を見るも、亦喜ぶべし、陸道成

○人の善を爲すを見て、我必む之を愛す、我能く善を爲さば、人豈我を愛せざるものあらんや、王陽明

○人の不善を爲すを見て、我必む之を惡む、我苟くも不善を爲さば、人豈我を惡まざるものあらんや、
同上

○言多ければ口の過多く、人に惡まれ禍起る、慎みて多く言ふべからば、殊に人を譏る、莫大の惡事

あり、戒めて人の非を云ふべから
ば、大和俗訓

○人の道に仁を行ふに在り、仁を
行ふの道に人を愛するに在り、人
を愛せんとあらば、先心の私を去
り、人我の隔てなくして、憐れの心
を擴むるに在り、五常訓

○小兒の時より、心持柔に人を愛
す情ありて、人を苦しめ侮らば、常
に善を好む、人を愛し、仁を行ふを
以て志とすべし、童子訓

○人を犯さざること、易く、人の
我を犯せども、報ひざること、難

し、大和俗訓

○富む時親まじ、貧き時疎んぜざ
る、眞の大丈夫あり、富む時進こ、
貧き時退く、眞の小人あり、願體集
○人の小過を責めば、人の陰私を
發かば、人の舊惡を念れば、三の者
の惟に以て徳を養ふのみあらば、
亦以て害を遠ざくべし、蓮生箋

○臣の君に事ふる、子の父に事
ふるが如くす、唯義の在る所に
則ち命を捨て、忠を效す、啓蒙篇
○祇して君の法度を承け、孝悌を
其家に行ひ、稼穡に服勤して、以て
王職に供する、此れ兆人の忠か
り、忠經

○國課早く完ければ、即ち囊橐餘
なきも、自から至樂を得ん。治家格言

○凡人の子ともの禮、冬ハ温に
て夏ハ清くし、夕に定めて晨に省
こる、禮記

○子婦の孝ある者ハ、父母舅姑の
命にハ逆かこと勿れ、怠ること勿

れ、同上

○父母之を愛すれば、喜ぶて忘れず、
父母之を惡まば、懼れて怨むるあし、
父母過あれば、諫めて逆まば、曾子

○孝子の深愛ある者ハ、必む和氣
あり、和氣ある者ハ、必む愉色あり、
愉色ある者ハ、必む婉容あり、孝經

○其人の行の善不善を觀んと欲すれば、必ず先其人の孝不孝を觀る、慎まざるべけんや、懼れざるべけんや、童蒙訓

○毎日夙に起きて家庭を掃除し、先父母の氣色を候がひ、飲食の好む所を問ふ、之を進め、求めあらひ

之を奉じ、務めて其歡心を盡すべし、家道訓

○父母若し遠方に在れば、則ち勤めて書信を致し、其安否を問ひ、心常に之を思ひ、憂愁戀憶す、童子習

○身體髮膚、之を父母に受けたれば、敢て毀ひ傷らざらん、孝の始

めあり、身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯す、孝の終あり、孝經

○君子敬せざるあきあり、身を敬するを大ありといひ、身の親の枝あり、敢て敬せざらんや、其身を敬する能はざれば、是其親を傷ふあり、

大戴禮

○善人と居れば、芝蘭の室に入るが如く、久しくして自ら芳む、惡人と居れば、鮑魚の肆に入るが如く、久しくして自ら臭し、顏氏家訓

○夫れ習ひ正人と居れば、正しからざる能はざるあり、猶楚に生長

すれバ、楚言あらざる能ハざるウ
ごときあり、孔子曰く、少成ハ性の
若しと 大戴禮

○幼き時より、年老て木とありき
人、才學ある人、古今世變を知れる
人に馴れ近きて、其物語をきく木
ほえ、物に書きつけおきて、忘るべ

からび 童子訓

○疑をしき事をば、知れる人に尋
ね問ふべし、古き事を知れる老人
の物語を聴くことを好きて嫌ふ
べからび、物ごとに志ある人の後
に必ど人に勝るものあり、同上
○見る所、期する所、遠く且大から

ずんばあるべからば然れども之
 を行ふの亦須からく力を量りて
 漸することあるべし志大にして
 心勞し力小にして任重らんば恐
 らくは終に事を敗らん 近思錄

○世に交るに、和して流れざる
 を善しと云、和すれば人に背らば

流れざれば道を失はば、是世に交
 る善き程の中道あり 大和俗訓

○或人曰く徳を以て怨に報ひば
 如何、孔子曰く、何を以てか徳に報
 ひん、直を以て怨に報ひ徳を以て
 徳に報ひよ、 論語

○人我に無禮ありとて、我が恥辱

におらざることを咎むべりらば、
人の無禮を宥め恕して堪忍すれ
ば、我心平和にして樂を失ひば、人
に争むべりて無事あり、大和俗訓

○朋友の間へ、己を謙して相下り、
善を揚げ惡を隠し、小過を赦して
小忿を懲し、始終交を全くせば、斯

に可あり、童子問

○朋友の親疎とも、に物を言ひ交
をし、事を頼みあふものあれば、第
一貞信にして相欺りざるを本意
とすべし、五倫名義

○人事百般すべて遜讓を要し、但
し志の師に譲らざるべし、又古人

に譲らざるべし、言志録

○貧賤ある人も、若し能く書を讀んで古の道を知り、古の事に通ぜば、遙に富貴に優るべし、何ぞ貧賤を苦しめて、富貴を羨まんや、文訓

○君子食飽んことを求むることなく、居安からんことを求むること

となく、事に敏くして言に慎み、有道に就て正すを、學を好むと謂ふべきの事、孔子

○學問の日々に進むを昔と比、日ごとに一事を知らば、一月に三十事、一年に三百六十事を、知る十年に三千六百事を知らば、大に學問

進むべし、文訓

○人一たび之を能くすれば、己れ之を百たびす、人十たび之を能くすれば、己れ之を千たびす、果して此道を能くすれば、愚ふり雖も必を明かに、柔ふりと雖も必以強からん 中庸

○事の勉強に在り、勉強して學問すれば、聞見博くして智益明あり、勉強して道を行へば、徳日々に起りて大に功あり、董仲舒

○一心の萬理を具へたり、能く心を存して、而して後に以て理を窮むべし、朱子

○天下の難事、必ず易きに作り、天下の大事、必ず細きに作る。老子

○瓜田に履を納れば、李下に冠を

正さば、文選

○己れに刻するを儉と爲す人に儉するを刻と爲す人、儉と刻との分を知らば、其世を涉るに於てや、

思ひ半に過ぎん、董文恪

○博く諸人を愛して、其内にてとりわき善人を親しむべし、善人を親しめば、善き事を見習ひ、聞習ひ、又其諫めを受け、我過を聞きて改むるの益あり、童子訓

○人に約して、其言を違へどと思

のど、初め約せんとする時、其人の
言へる事、義か不義かを省くるべ
し、義に協りて約すべし、義に背
りて約すべからば、五常訓

○心定まる者の、其言重くして舒
かり、定まらざる者の、其言軽くし
て以て疾あり、程伊川

○飲食淡薄にして、身を勞動すれ
ば、食氣滞らば、氣血環り、脾胃破れ
ずして、生を養ふに宜し、同上

○言語を慎み、以て其徳を養ひ、飲
食を節にし、以て其體を養ふ、事の
至近にして、繋る所至大なる者の、
言語飲食に過るゝ莫し、程子

○我身朝夕飲食の俸養ハ、輕くして、身をハ、勞動すへし、奢りて酒食の美を好ミ、怠りて身を安逸にすべからば、奢らば怠らば斯くの如すれハ、第一徳を養ひ、次に身を養ひ、次に財を養ふ、三の益あり、家道訓

○凡人の人たる所以の者ハ、禮義

あり、禮義の始めハ、容體を正くし、顔色を齊へ、辭令を順にするに在り、禮記

○大凡人の容貌動静ハ、必ず先其衣冠を正くして、其瞻視を尊くせよ、或ハ坐し或ハ立たんこと、必ず須からく端正あるべし、人と説話

すること必ず須からく謹慎あるべし、行歩の必ず須からく安詳あるべし、童子習

○若し人家に入りて、將に堂に上らんとする時、必ず先聲を發して聲歎し、而して内に在る人を以て之を聞りしめよ、戸若し先に開

けされば、則ち我れ亦開き、戸若し先に閉ぢたれば、則ち我れ亦閉ぢよ、同上

○大抵衣服の、但、身を蔽ふを要するのこゝ、當に儉素を以て尚しとすべし、且慈母の手製針線あるを念ひて、尤も當に愛惜して、之を護持

すべきあり、童子習

○羣小兒と羣聚し、相戯れて其服
する所の衣を粹み破るべからば、
垢穢に親近して其淨潔あるを汚
染すべからば、同上

○人僮に向て、某人僮の恩に感ず
と説くことあれば、則ち云へ、他我

に恩あり、我れ他に恩ありと、則ち
恩に感ずる者之を聞きて其感益
深し、揚椒山遺屬

○人僮に向て、某人僮を惱まし、僮
を謗ると説くことあれば、則ち云
へ、他と我と平日最も相好し、豈我
を惱まし、我を謗るの理あらんか

小學修身編 卷四
と、則ち我を惱まし、我を謗る者之
を聞き其怨即ち解く、同上

小學修身編卷四終

明治十五年九月四日版權免許
同 年九月出版 定價金八錢

愛智縣平民

編輯人

石川鴻齋

芝區片門前二丁目十四番地

東京府士族

出版人 前田 圓

京橋區加賀町十八番地

初等
小學

修身篇

石川鴻齋編輯

五

7
5
75

大日本教育會圖書館			
函	四	一	東
一	三	八	丁
架	號	架	一
號	冊	函	

K110.1
10
5